

訳者解説

慎改康之

『ミシェル・フーコー講義集成 4 精神医学の権力』所収

これは MicrosoftWord によって作成した原稿を pdf 形式に変換したものです。

『講義集成 4』に収録されているテキストと若干異なる部分があります。

訳者解説

本書『精神医学の権力 コレージュ・ド・フランス講義 一九七三 一九七四年度』は、Michel Foucault, *Le pouvoir psychiatrique. Cours au Collège de France* (1973-1974), Paris, Gallimard / Seuil, 2003 の全訳である。

一九七三年十一月七日から一九七四年二月六日にかけての十二回にわたる「精神医学の権力」講義は、十八世紀末以降の精神医学の歴史を、権力の問題を中心に据えて分析したものである。ピネルやエスキロールによる十九世紀前半の実践から、ルーレをその代表者とする「道徳療法」の局面を経て、神経学の登場およびシャルコーの舞台へと至るまでの精神医学の歴史の変容を扱いつつ、この講義は、フーコーのいくつかの著作とのあいだに密接な関係を保持している。まず、狂気を扱う医学的実践を研究対象とすることによって、講義はもちろん、一九六一年の『狂気の歴史』において提示された問題系と明白なやり方で交叉している。また、講義において精神医学をめぐるなされている権力分析は、その翌年刊行の『監獄の誕生』に直接生かされている。さらに、一九七六年の『知への意志』には、とりわけ精神分析的な思考に対して、講義と同様の態度表明を見いだすことができる。したがって、まずはこれらの著作との関係について問いかけつつ、講義の射程を明らかにしていきたい。

狂気の表象から権力の装置へ

『狂気の歴史』は、十七世紀から十八世紀にかけてのいわゆる古典主義時代において狂気がどのように経験されていたのかという問題を中心に据えていた。そしてそこで明らかにされたのは、十七世紀にヨーロッパ中で大々的に開始される監禁の実践の後、十八世紀の末に狂気が精神の病として確立され、精神医学および精神病院が誕生するに至るという一連のプロセスであった。これに対し、「精神医学の権力」講義は、フーコー自身もはっきりと語っているとおり、一九六一年の著作の「到達点」ないし「中断点」から出発しつつ、以前とは抜本的に異なるやり方によって考察を開始する。自らがかつて使用していた概念の有効性を問い直しながら、講義は、古典主義時代における狂気の「表象」の分析に代えて、十九世紀以降の精神医学および精神病院における「権力の装置」の分析を行うことになるのである。『狂気の歴史』と講義とのあいだのこうした「逆説的」関係については、本書の編者ジャック・ラグランジュによる「講義の位置づけ」が、フーコーにおける「概念的ダイナミズム」と一九七〇年代の精神医学の状況とをともに考慮に入れながら詳細に解説しているので、そちらを参照していただきたい。ここではただ、『狂気の歴史』を引き継

ぐものとしてのこの講義において提出された問題が、翌年の「異常者たち」講義においても継続して扱われることになるということのみを付け加えておくことにしよう。「精神医学の権力」講義が明らかにしようとしているのは、もっぱら、精神病院の内部において精神医学的権力が構成されるそのやり方である。これに対し、翌年の講義においては、精神病院の外へと精神医学が拡張することによる「精神医学の第二の誕生」が語られることになる。すなわちそこでは、精神医学が、「異常者の科学」、つまり、もはや「病」ではなく「行動様式の逸脱」をその対象とする科学となっていく過程が分析されることになるのである。したがって我々は、監獄問題をめぐる「具体的な政治行動」への専念によって残念ながら書物のかたちで実現することはなかった『狂気の歴史』の続編を、素描というかたちではあるにせよ、一九七三年から一九七五年にかけての二つの講義録のうちに読むことができるのである。

規律権力と君主権的権力

「異常者たち」講義の「講義要旨」にもあるとおり、すでに一九七〇—一九七一年講義「知への意志」において「処罰の伝統的な法的手続き」の問題を提起した後、フーコーは、権力と知との関係の分析を軸に以後数年間の講義を組み立てることになる。西欧における処罰形式の歴史的变化について考察した『監獄の誕生』は、したがって、「精神医学の権力」講義を含むそれまでの一連の講義において行われた研究の結実である。この著作が示そうとしているのは、身体刑から監獄への閉じ込めへという刑罰制度の移行が、権力形式の変容にもとづくものであるということである。すなわち、かつての「君主権的権力」に代わって、「規律権力」という新たな権力のテクノロジーが登場したからこそ、我々の眼には過剰に残酷であるようにも思われるやり方で身体を痛めつける刑罰が終わりを告げ、一見穏やかで理性的な禁固刑が一気に普及したのだ、というわけである。ところで、「精神医学の誕生」講義が、十九世紀の精神医学における諸々の戦術を可能にしたものとして示しているのも、まさしく、「君主権的権力」から「規律権力」への権力形式の変化である。つまりそこでは、一九七五年の著作においてと同様、過剰な出費、非等質的關係などによって特徴づけられる権力から、等質的關係、絶え間のない監視などによって特徴づけられる権力へという変化が語られているということだ。そして講義に関して注目すべきは、そこにおいてそれら二つの権力形式が、より図式的なやり方で対比させられているという点である。さらにそこには、一方の権力が他方によって取って代わられることになったその歴史的プロセスがどのようにして可能になったのかということについての分析もある。したがって、フーコーの言う「規律権力」と「君主権的権力」がどのようなものであるかを概観しようとするなら、『監獄の誕生』よりもむしろこの講義を参照した方がよいとすら言えるであろう。

ここで訳語の選択について一言述べておきたい。まず、通例に倣って「規律権力」と訳

したのは、「*pouvoir disciplinaire*」および「*pouvoir de discipline*」というフランス語である。これについてはすでに訳語がほぼ定着しているのであえて説明は必要ないかもしれないが、一つだけ、動詞「*discipliner*」の持つ「しつける」という意がこの語のニュアンスを最もよく表しているように思われるということのみを指摘しておこう。そして、「君主権的権力」の原語は、「*pouvoir de souveraineté*」である。形容詞「*souverain*」は、「至上の」、「最高の」、「主権を有する」という意味を持ち、これが名詞として使用される際には「君主」、「支配者」といった意味になる。そして名詞「*souveraineté*」は、一般に、「君主権」、「主権」などと訳される。講義にもあるとおり、フーコーが「*pouvoir de souveraineté*」を語るとき、それによって指し示されているのは、いわゆる君主によって行使される権力だけではない。それはまた、封主や司祭によって行使される権力を指し示してもいる。すなわち、臣下や封臣や信徒に対して君主や封主や司祭がその至上の力を行使するというかたちで作動するのが、この権力であるということだ。したがって、訳語としては、そうした多様性を含み込むために、「君主権」に「的」を加えて「君主権的権力」を訳語として用いた。いずれにしても、これら二つの権力については、本書における明快な記述に実際に接することによってより正確な理解が得られるであろう。

精神分析の考古学

『性の歴史』は、当初、セクシュアリティについての歴史研究をやはり権力分析という軸に沿って行おうという企図にもとづいて構想されていた。後の大幅な計画の変更によって結局実現することのなかったそうした構想において、いわばその序章として書かれた一九七六年の『知への意志』は、西欧において性が長いあいだ抑圧されてきたとする「抑圧の仮説」の騒々しさから距離を取りつつ、むしろそうした仮説も含めた性についての言説の量産そのものを問題化しようとするものであるが、そのなかでフーコーは、そうした研究が、「精神分析の考古学」としての価値を持ちうるであろう、とを語っている。すなわち、性に関して語ることを避けがたい任務として我々に課すものとしての「セクシュアリティの装置」が、歴史のなかでどのようにして形成され、どのようにして発展したのかを示すことによって、精神分析において示されるような思考もやはりそうした装置の内部に明確に位置づけられるものであるということが明らかにされるだろう、と。ところで、精神分析の登場を、一つの新しさの出現として示すのではなく、逆に、それまでの歴史的プロセスの必然的帰結の一つとして示そうとするこうした態度は、「精神医学の権力」講義にもやはり見いだされるものである。講義が語っているのは、フロイトによって使用されるさまざまな概念が、精神医学の実践のなかですでに登場していたということ、そして、精神分析という道が、ヒステリー患者の性的身体を前にした神経科医の沈黙によって開かれた道に他ならないということである。また、この講義の「講義要旨」は、精神分析を、「真理の産出が常に医学権力に適合し続けるようにしつらえられた空間において医学権力を再構成

し、真理を産出するもの」とみなしつつ、精神医学と精神分析との連続性を語っている。そしてさらには、翌年の「異常者たち」講義についても、これを一種の「精神分析の考古学」として読み解くことができるであろう。というのも、そこで示されているのはまさしく、精神分析にとっての主要な概念としての「性本能」が、怪物的犯罪をめぐる「本能」の発見と、自慰する子供における「セクシュアリティ」の問題化によって、どのように準備されていたかということであるからだ。要するに、一九七三年から一九七六年にかけてのフーコーにおいては、フロイトの仕事を精神医学の歴史およびセクシュアリティの装置の歴史の内部に組み入れようという企図がはっきりと示されているのである。

ところで、精神分析をめぐるこうした態度は、これもやはり、『狂気の歴史』との一つの差異を示すものである。というのも、ジャック・デリダも指摘しているとおり（Jacques Derrida, « Être juste avec Freud » in *Penser la folie*, Paris, Galilée, 1992）、一九六一年のこの著作には、フーコーの精神分析に対する両義的な態度を見て取ることができるからだ。一方において、この著作は確かに、精神分析をテュークやピネルの伝統に組み入れつつ、精神医学からフロイトへの連続性を語っている。つまりそこでは、精神分析における「分析的状況」が、精神医学における医師と患者との権力関係を正確に引き継ぐものされているということだ。「フロイトは、ピネルとテュークが監禁においてしつらえた構造のすべてを、医師の方へと滑り込ませた」のであり、その限りにおいて、「精神分析は非理性の声を聞きえないし、今後も聞きえないであろう」というわけである。しかし他方、『狂気の歴史』には、精神分析がもたらした断絶についての記述もある。すなわち、狂気を「病」に還元してしまった心理学および精神医学とは異なり、精神分析は、「非理性」との対話を開始するものとして評価されているのである。精神分析を精神医学の歴史の延長上に置こうとする一方で、その独自性とそれがもたらした歴史的断絶を評価しようとする、フーコーのこうした「振り子」運動は、「精神医学の権力」講義および『知への意志』においてはもはや見られない。もちろん、デリダが言うように、そもそもセクシュアリティの装置に関する歴史的研究という企図そのものが、精神分析的な発想、とりわけ権力と快楽との絆という発想に多くを負っているということは、十分ありうるであろう。しかし、いずれにしてもフーコーにおいて精神分析は以後、精神医学およびセクシュアリティの歴史のエピソードのうちの一つとして語られることになるのであり、その限りにおいて、そこには『狂気の歴史』からの一つの転回を見て取ることができるだろう。そして、こうした転回を可能にし、必然的なものとしたと思われるさまざまな要素のうちの一つとして考えられるのが、当時のフランスにおける精神分析への熱狂という状況である。一九六六年の『エクリ』出版以後、一九六八年の五月革命を経て、フランスでは、大学やその周辺においてラカンを読むためのセミナーが開かれたり、人々が競って分析治療を受けにパリにやってくるということが、盛んに行われていた。こうした状況に、ドゥルーズとグアタリによる一九七二年の『アンチ・オイディプス』が一石を投じることになるわけであるが、フーコーのフロイトに対する態度変更もやはり、精神分析への盲目的な傾倒に対して距離を取ろうと

するものであったのだらうと思われるのである。

以上のとおり、「精神医学の権力」講義は、狂気、権力、セクシュアリティを扱った三つの著作とのあいだに、密接な関係を保っている。本書は、それらの著作を補完するものとして、また、それらにおいて示されているフーコーの思考を別の角度から照射するものとして、大いに役立つものであると言えるだろう。

*

「精神医学の権力」講義は、そのタイトルから推測されるとおり、自らを科学と称する精神医学が実は権力のテクノロジーによって徹底して貫かれているということ、そして精神医学的な知が科学的な知とは全く無縁のものであるということを告発しようとするものである。つまり講義においては、精神医学からの容赦のない価値剥奪がなされているということであり、この点については、『狂気の歴史』においても全く同様である。それでは、精神医学に対するこうした攻撃的言説が、フランスではいったいどのようなやり方で受けとめられてきたのであろうか。そして、そうした攻撃に対する反論、反撃がありうるとすれば、それはどのようなものとなるだろうか。こうした問いに対する一つの回答を示すものとして、「もう一つの狂気の歴史を求めて」と題されたマルセル・ゴーシェによる注目すべきテキストがあるので、これについて簡単に紹介しておきたい (Marcel Gauchet, « À la recherche d'une autre histoire de la folie », in Gladys Swain, *Dialogue avec l'insensé*, Paris, Gallimard, 1994)。

ゴーシェによれば、すべては『狂気の歴史』の衝撃から始まったという。この書物以前、精神医学の歴史とは、もっぱら、先人の偉業を称える一種の聖人伝にすぎなかった。つまりそこでは、迷信を追い払ってついに狂気を科学的に扱うに至るまでの、精神医学の発展、進歩の歴史のみが語られていたということである。一九六一年のフーコーの著作は、こうした風景を根本的に変容させた。すなわち、この著作とともに、精神医学の「卑しい素性」を告発しようという動きが、至るところに生じたということであり、こうしてフランスにおける精神医学の価値が実際に大きく貶められることになったのである。

しかし、とゴーシェは言う。この著作のそうした意義を認めた上でこれを注意深く読んでみると、性急な関連づけによる論証の不十分さ、資料の扱いのぞんざいさが見えてくる、と。そしてとりわけ彼が重要視するのは、十八世紀末から十九世紀初めにかけての、精神医学の確立に関する分析の欠落である。ところで、これはまさしく、『狂気の歴史』の「中絶点」に位置づけられる分析であり、フーコーはこれを「精神医学の権力」講義で再び取り上げ直すことになるわけだが、しかし、おそらくこの講義に何らかのかたちで通じていたに違いないゴーシェは、そこでなされているような「規律権力」と精神医学とを関連づけようとする考察によってもやはり、当時の精神医学の誕生を説明することはできない、と言う。そして彼は、ピネルがピセートル施療院で仕事を始める一七九三年から、ピネル

が死去しその弟子エスキロールがシャラントンの院長となる一八二六年までのあいだに、実際には、狂気をめぐる考え方の抜本的な変化が起こったのだということを指摘する。すなわち、フォーコーが狂気をめぐる実践の側面を強調し、精神医学の理論的側面を二次的なものとみなしているのに対し、ゴーシェは、まず理論的变化が最初に起こったのであり、次いでこれが徐々に実践に反映されていったのだ、と主張するのである。

では、精神医学の確立の根底にあるとされるそうした理論的变化とはいったい何か。ゴーシェによればそれは、「完全なる狂気」の放棄、すなわち、自らの妄想のなかに全面的に閉じこもってしまった狂気という考え方の放棄である。そうした変化は、まず、ピネルによってもたらされた。ゴーシェが注目するのは、一八〇〇年の『精神病に関する医学 = 哲学論』に表明されている、狂気には何がしかの残余がある、という考え方である。すなわち、かつて狂気は主体性の完全なる消失として考えられていたのに対し、ピネルには、狂人には何がしかの主体性が残っているという考えが見られる、ということである。そしてピネルの精神医学は、何よりもまず、そうした主体性の領野の探索であった、というわけだ。

そして次にエスキロールが登場する。ピネルにおいて暗黙のうちに示されていたものが、エスキロールによって明白なかたちで与えられることになる。つまりエスキロールは、情念という通常の経験と狂気の経験との類似を示すことによって、狂人を絶対的な他者とみなすのではなく、我々と同じ人間であるとみなすことを可能としたのであり、こうして、狂気と理性との相互理解の可能性が開かれることになる。そしてまさしくここにこそ、「道徳療法」の意義があるのだ、とゴーシェは言う。すなわち、「道徳療法」とは、何よりもまず、狂人のうちに残された主体性とのコミュニケーションの試みなのだ、と。「精神医学の権力」講義において、フォーコーは、ピネルやエスキロールにおける実践を、全面的に、規律権力の典型的なテクノロジーとみなしている。これに対し、ゴーシェは、十九世紀初めの精神科医たちに見られる理論的練り上げを、狂気との対話を開始する重要な契機としてとらえつつ、貶められた精神医学の価値を回復させようとしているのである。

ここではもちろん、ゴーシェの分析にもとづいてフォーコーの仕事を批判することが問題なのでもないし、逆にフォーコーをゴーシェに対して擁護することが問題なのでもない。精神医学の歴史をめぐるフォーコーの仕事がどこまで正当なものであるかを明らかにするためには、詳細かつ緻密な研究が必要となるであろう。ここではただ、いわば精神医学の側から描き出された「もう一つの狂気の歴史」とともに、本書に対する一つの批判的な視点を提供することで満足しておきたい。少なくともこれによって、フォーコーの著作および講義を新たな光のもとでとらえる手がかりが得られるはずである。

*

訳文の作成にあたっては、一九七三年十一月七日の講義から一九七三年十二月十二日の

講義までの前半部分について、放送大学等で非常勤講師を務める近江屋志穂氏に下訳の作成というかたちでお手伝いいただいた。仕事の遅い訳者が比較的予定通りに作業を進めることができたのは、彼女の協力の賜物である。なお、最終的には訳者が全面的に訳文を調整しており、訳文に関するすべての責任はもちろん訳者にある。

また、常々お世話になっている東京大学の原和之氏には、とくに精神分析に関する多くの事柄についてご教示をいただいた。氏に対しては、感謝の言葉をいくら並べても足りることがない。

そして最後に、前任校筑波大学において、この講義録の原書を一年間で読み終えるという無謀な授業に最後までつきあってくださった学生諸君にも、この場を借りて謝意と敬意を表したい。月曜の授業準備のために訳者自身毎週禁欲的な週末を過ごさなければならぬという状況は、翻訳作業のペースメーカーとして大いに役立つものであった。また、彼らとともに過ごした時間は、えてして独断的なものとなりがちな翻訳作業に多くの示唆をもたらしてくれた。あの授業、あの時空の共有が、彼らにとっても有意義なものであったとしたら幸いである。

二〇〇六年一月十一日

慎改康之